

乳がん 高度検診・治療センター NEW ーす NO. 20

2016.1

抗がん剤治療は怖くない 支持療法の進歩



一般に抗がん剤治療（化学療法）というと吐き気・嘔吐、白血球が減って熱が出る、脱毛、などどうしてもネガティブなイメージがつきまといまいます。たしかに乳がん薬物療法のうちでも、抗がん剤は、内分泌療法薬や分子標的治療薬に比べて副作用が大きいのは事実です<表>。ただ、抗がん剤の副作用を軽減するための治療法（支持療法と呼びます）が近年飛躍的に進歩してきました。ここでは吐き気・嘔吐および白血球減少に対する支持療法の最新の治療について解説します。

<表>

抗がん剤の副作用

- 吐き気・嘔吐
- 白血球減少（好中球減少）
- 脱毛 ●倦怠感
- 口内炎 ●心毒性
- 手足のしびれ ●むくみ
- 関節や筋肉の症状 ●不妊 など

■吐き気・嘔吐

吐き気や嘔吐は、消化管粘膜への直接刺激や嘔吐に関連した脳の一部が刺激されておこります。対策として、抗がん剤の種類に応じて適切な吐き気止めを用います。吐き気の起こる頻度の高い抗がん剤使用にあたっては、抗がん剤点滴の前に予防的に吐き気止めの薬を使用します。すなわち抗がん剤投与と同時にパロセトロン（アロキシ）やデキサメサゾン（デカドロン）を投与し、さらに帰宅後の吐き気止めとしてアプレピタント（イメンド）、デキサメサゾン（デカドロン）などを予防的に投与します。こうした対応により吐き気や嘔吐に悩まされる頻度は格段減りました。

当院では、外来における抗がん剤治療にあたって医師・看護師・薬剤師がチームとなってひとりひとりの患者さんをサポートしています。

乳がんの抗がん剤治療や副作用対策について、さらに詳しいことをご存知になりたいことがありましたら、乳がん高度検診・治療センターあるいは外来化学療法室にお問い合わせください。

■白血球減少（好中球減少）

抗がん剤の影響により、骨髄が影響を受け白血球が低下します。白血球のうち的好中球は病原菌と闘う役割を担います。発熱をとめない好中球が減少する発熱性好中球減少症では、好中球を増やすフィルグラスチム（グラン）などのG-CSF（顆粒球コロニー形成刺激因子）製剤を使用することがあります。

今までは発熱性好中球減少症が起こってから治療していたのですが、最近では発熱性好中球減少症が起こりそうな抗がん剤治療や、患者さんの年齢などによっては持続性G-CSF製剤であるペルフィルグラスチム（ジールスタ）を予防的に投与することが増えました。



市立貝塚病院

TEL : 072-422-5865